

# 対話が育む 豊かな言葉



## 思考力、判断力、表現力 その根底を支える言語力

### —木下先生はどんな研究をなさっているのでしょうか？

一言で言いますと「言葉の教育」です。国語科の授業や教材、それらを支える理論や歴史の研究ということになるでしょうか。教職を希望する学生たちに国語科の授業をどのように作ってあげればよいのかを指導するのが私の大学での授業の中心となります。また、あちこちの小中学校に出向いて直接現場の先生方とお話をすることもあります。

### —2008年の学習指導要領改訂に伴って「言語活動」がキーワードになりましたが、その点について先生はどうお考えですか？

教育というのはすべて言葉で行われています。子どもたちの学習活動も同じで

すよね。私自身は「言語活動？何をいまさら…」というのが本音ですが(笑)。

この変化の激しい社会で生きていくためには、思考力、判断力、表現力などが重要になります。その根底を支えるのが言語力。これまでは国語科に特化していましたが、今後は他の教科などでも言語や論理的思考力を意識した授業を進めていきたいと思いますというのが文部科学省の方針です。

なぜこのタイミングで言語活動がキーワードになったのかと言えば、世界的に行っている学力調査等で、近年日本の成績が低下したのが大きな要因です。

ではどうしてそのような結果になってしまったのか。それは論理的な言語力が足りないからではないかと。国語科の授業で物語を読んだり作文を書いたりするだけでは培えないのではないかと指摘されはじめ、文字だけに限らず、図、表、絵、あるいは音声といった多様な情報媒体を「読む」、そこでの言葉の動きを大事にする。そうすることで総合的な言語力を引き上げることができるのだという結論に至ったわけです。

正直、私自身はこれとはまた方向性の違う考えです。デジタルな時代だからこ

そ、アナログを大事にしなければならないし、それは国語科が中心的に担うべきだと考えています。言葉を使うのは人間ですからね。物語を想像豊かに読んだり、自分を見つめ、自分を考えるための作文を書くということが人間性や言葉を豊かにすると私は考えています。

### —先生のご著書は「読む」ことに重点を置いているように感じました。

そうですね。人間的な感性を養うためには「読む」ことが大切だと感じます。ただし読むというのはただ文字面を追うだけではありません。物語を読み、自分を投影して、人の悲しみや痛みを知る、つまり読む＝想像することなのです。

私は長く小学校教諭をしてきましたが、たとえば子どもたちと『おおきなかぶ』を読みますと、おじいさんやおばあさんだけではなく、「かぶ」にまで感情移入したりします。子どもたちは物語の世界に惹かれているんですね。

それは子どもだけでなく、大人も同じだと思います。人間は物語がないと生きていけないのかもしれない。

2008年の学習指導要領改訂に伴い、重要視され始めた「言語活動」。

さまざまな言葉を身につけるためにはどうすればいいのでしょうか。

そのヒントを宮城教育大学教育学部・国語教育講座の木下先生に教えていただきました。



宮城教育大学  
木下 ひさし 先生

国語教育講座准教授。  
成蹊小学校(東京)教諭を経て、2011年より現職。専攻は国語科教育学。教員養成とともに、学校現場におけるよりよい授業づくりをめざしている。研究のキーワードは、子どもことば・文学教育・生活綴方教育。国語教科書(教育出版)の編集にも携わる。

## 子どもの言葉は 「母語」に育まれる

### —では「読む」力を習得するためには何が必要ですか？

何より言葉そのものを育むことです。少し遠まわしな言い方をしますね。

私たちは日本語を話します。では、なぜ日本語が話せるのでしょうか？日本人だから？日本国籍を持っているから？違いますよね。日本語が使われている社会、家庭、もっと言えば日本語を使う母親に育てられるからです。

先日こんな光景に遭遇しました。新幹線に乗っている時、小さな子どもがお母さんに話しかけていました。でも、そのお母さんはずっと「スマホ」を操作していて返事はするのですが子どもの顔を見ないんです。これは危険だなと感じました。

また家庭で「バカ」とか「死ね」とかそういう殺伐とした言葉が日常の中にあれば、それを子どもが使うようになり、他の子どもへ連鎖していく。性格が乱暴だから乱

暴になるというのがありますが、言葉のせいで乱暴な性格になることだってあるのです。

それと「キレる」という行動。あれはパニックに陥った理由を説明する言葉を持っていないからだと私は感じます。

言葉は生身の人間との対話の中で養われます。そしてたくさんの言葉を持てば自分を表現し、人間を豊かにしてくれます。ですから我々大人は子どもに対し言葉を用いることに自覚的になり、肉声を大事にしなければならないと思います。

### —成長するにつれ、国語が嫌いになってしまう子どもがいます。楽しく学ぶためのヒントはありますか？

たしかに1年生の時に好きだったのに高学年になってから嫌いになったというように、国語という教科の好き嫌いは典型的ですね。

言葉は経験の中で覚えていくものですから、楽しい体験ができればきっと国語の授業が好きになるのではないのでしょうか。

国語嫌いの理由の一つに漢字があります。もちろん覚えなくてはならないものですから仕方ない面もありますが、成り立ちを調べたり、分類したりと楽しく

する工夫はいろいろあると思います。また、書き順なんてあまり気にしないでいいんです(笑)。何より実際に作文などで使うことによって表現や理解の幅が広がるという経験をするのが大切でしょう。〇とか×で片づけられないのです。

言葉のコミュニケーションの始まりは受け入れること、受容ではないでしょうか。ですから、言葉の教育ではいきなり間違いを指摘したりするのではなく、まず受け入れる。子どもという存在を否定しないで寄り添い受け入れる。それが出発点になると思います。「だめよそんな言葉づかい!」とすぐに叱るのではなく「どこで覚えたの?」とまずは声をかける。それが先ほどお話しした対話だと思うのです。

本の読み聞かせも大切。読書って楽しいですよね。その有意義な時間を大人が保障してあげることが必要だと思います。よく「どの本がいいですか?」と聞かれますが、子どもたちそれぞれに好みや考えがありますから「絶対にこの本!」はありません。

そして繰り返しになりますが、本を読み聞かせることはもちろん、日常の中でもお母さん方の肉声で「母語」をたくさん伝えてほしいですね。機械に子育てを任せないということです。